

I ボンボニエールの始まりの物語

現在の皇室にも続くボンボニエール、その最初の物語は明治22年(1889)に始まる。

皇室 西欧化への邁進

明治維新後、皇室にも怒涛の変化が押し寄せた。天皇が住み慣れた京都を後にし、旧江戸城に入ったのは、元号が明治となった1868年10月のこと。その半年後、英国王子が日本を訪問することとなった。初めての外国賓客へのおもてなしに際し、浜離宮内に迎賓施設延遠館を作り、高級料亭八百善から和食をデリバリーした。日本側は考え抜いて対応したが、日本が国際儀礼のルールを知らなかったために、英国側からは苦情が来た。

そこから皇室も猛然と西洋の風習を取り入れることとなる。まずは見た目からと、天皇は明治6年(1873)4月に断髪し、洋装となった。肉食も解禁し、宮中晩餐会の料理もフランス料理となった。

明治16年には鹿鳴館が竣工し、舞踏会が催されるようになった。しかし、人前で肌を見せることなどなかった婦人達はなかなかドレスを着用しなかった。そこで文字通り一肌脱いだのが皇后であった。明治20年の新年儀式にはドレスで臨み、そこから皇族や華族婦女子の洋装化が進んだ。皇后はドレスの生地や装飾には国産品の使用と伝統技術による加飾を奨励した。明治維新で職を失った者たちへの救済と伝統文化の保存のためである。

ボンボニエールの誕生

そして明治22年2月11日大日本帝国憲法発布式を迎えた。東アジアで最初の立憲国家となったことを国内外に示すため、前年に竣工したばかりの明治宮殿で大規模な儀式と饗宴が開催された。その宮中晩餐会、食後のプティフルが皿や盆ではなく、銀の箱や美しい織の袋入りで配られた。それが初のボンボニエール。菊御紋と「二五四九 紀元節」銘が入った様々な容器が1400個用意された〔図①〕。

次にボンボニエールが登場するのは明治27年、天皇皇后の銀婚式である。西欧の習慣である銀婚式を滞りなく行うことで、日本皇室が西欧式儀礼を身につけたことを示す意味があった。銀婚式に因んで種々銀尽し。皇后のドレスも屏風も銀、そしてボンボニエールも銀製オリジナルデザインで作られた。当時の新聞によれば、制作を請け負ったのは後に帝室技芸員となる鈴木長吉で、饗宴に招かれた621人には「蓋に岩上の鶴亀を付した銀製菓子器」〔図②〕が下賜され、立食の宴に参加した1208人には「鶴亀の彫刻ある銀製菓子器」〔図③〕が配られたのである。

天皇の即位の物語

ボンボニエールは、大正期から昭和初期にかけて大流行する。その契機となったのは、紛れもなく大正天皇の即位大礼であった。

大正4年(1915)11月10日から17日にかけて京都で行われた大正天皇即位大礼は、明治までとは異なる形式で実施され、令和の即位の礼の基準となる部分も多い。

大正天皇即位大礼は京都で行われ、東京・京都間は天皇が乗車する豪華なお召列車が走り、博覧会も開催された。東京でも奉祝門が仮設され、造花や電灯で飾り付けられた花電車が走るなど、祝祭であった。

11月10日に天皇が先祖に即位を奉告する儀式が、14・15日には「大嘗祭」が行われた。その後16・17日には二条離宮(旧二条城)で「大饗の儀」が開催された。大饗の儀は収穫された新作物を天皇より賜る節会。16日の大饗第一日には、各地方の特産物による和食が供された。その際に銀製の挿華が列席者に下賜された。大正の挿華は京都御所紫宸殿前の桜と橘を模している。お雛飾りにも欠かせない、左近の桜・右近の橘である。全長23釐ほどで、銀で制作しているが、その造作の細かいこと、特に蕊は圧巻である。制作は東京美術学校(現東京藝術大学)の平田重幸。平田は17日の大饗第二日の入目籠形のボンボニエール〔図④〕の制作も担当した。入目籠とは、大嘗祭において、神に捧げる神衣を入れる神具のこと。これも繊細な竹編みを銀で表現している。

大饗第二日の昼と夜のメニューは即位礼史上初めての洋食となった。列席者2000名を超える晩餐会の献立から調理まで、全てを取り仕切ったのは「天皇の料理番」秋山徳蔵である。この夜宴の際には柏葉筒形のボンボニエール〔図⑤〕が配られた。柏の葉の重なりを銀で表現し、紐のかかる部分の葉には、わざわざ折込みを作るという細かい仕様がなされている。

京都での諸儀式の後、12月7日・8日には宮中饗宴が催されたが、この際には八稜鏡形ボンボニエール〔図⑥〕が下賜された。

この頃よりボンボニエールには品位(金属の含有量)や製造者を表す刻印が認められるようになる。八稜鏡形では、「三越」「玉屋」「村松」など数種類の業者名を確認できる。数千個という大量生産に対応するために、分散して発注制作されていたのである。



①片喰形黒塚文(大日本帝国憲法発布式)明治22年 ②鶴亀形(明治天皇大婚25年祝典)明治27年 ③正円番合形鶴亀文(明治天皇大婚25年祝典)明治27年 ④入目籠形(大正天皇即位礼大饗第二日)大正4年 ⑤柏葉筒形(大正天皇即位礼大饗夜宴)大正4年 ⑥八稜鏡形鳳凰文(大正天皇即位礼宮中饗宴)大正4年 ⑦太鼓形(昭和天皇即位礼大饗第二日)昭和3年 ⑧釣籠形(昭和天皇即位礼大饗夜宴)昭和3年 ⑨威儀鉢形(昭和天皇即位礼宮中饗宴)昭和3年 ⑩丸形鳳凰文(平成即位記念)平成2年 ⑪丸形鳳凰文(令和即位記念)令和元年 ⑫番合形案に鶯鶯文(立皇嗣記念)令和2年 ⑬柳筒形(常宮昌子内親王・竹田宮恒久王結婚)明治41年 ⑭台付文庫形(周宮房子内親王・北白川宮成久王結婚)明治42年 【①~④、⑩⑫は個人蔵、ほかは当館蔵】

II 外国との絆の物語

外国と友情を育むことは、皇室の大事な公務。
明治・大正・昭和と、その時代時代で絆が紡がれた。

日英の絆の物語

明治の御代、日本皇室は英国王室を模範とし、絆を深めた。

明治39年(1906)、明治天皇にガーター勲章を奉呈するためにコンノート公爵家のアーサー王子(コンノート卿とも呼称)が来日した。ガーター勲章は、1348年にエドワード3世によって創始されたイングランド・ガーター騎士団団員章である。英国民でこの騎士に叙せられるのは24人以内に限定されており、大変な名誉のもの。外国王には「特別騎士」として別枠があるが、それも現在8人のみである。騎士団はキリスト教徒が対象となる栄典である。その勲章が異教徒である明治天皇に東アジアの元首として初めて授与された。

その後、大正元年にも明治天皇の大喪儀に参列するため大正天皇へガーター勲章を奉呈するためアーサー王子が来日した。勲章は被授与者が亡くなると返上するため、明治天皇の崩御後すぐに英国王室は次代の天皇へのガーター勲章奉呈を決定したのである。その饗応晩餐会でのボンボニエールが扇形のものとなる[図a]。大正7年(1918)、大正天皇へ元帥杖贈呈のためにアーサー王子三度目の来日の際の宮中晩餐会では、まさにガーター勲章が文様となったボンボニエール[図b]が配られた。

大正天皇崩御の後、昭和天皇も昭和4年(1929)にガーター勲章を授与された。だが、昭和16年の対米英開戦とともにその栄誉が剥奪される。しかし、30年後の昭和46年、昭和天皇訪英の際に栄誉回復となった。ガーター勲章の長い歴史の中でも、一度剥奪された栄誉が再び回復されたのは、昭和天皇ただ一人である。

二人の皇太子の物語

その昭和天皇(裕仁親王)は、皇太子時代の
大正10年3月外遊の途についた。ヨーロッパ諸国
を荒廃させた第一次世界大戦が大正7年に終結し、
次代の天皇に世界を見聞し見識を広げて欲しいと
の国内での期待を受けての渡欧である。

5月9日英国に到着した裕仁親王はバッキンガム宮殿に3泊するという、英国王室極上のおもてなしを受けた。公式な贈答品は日本の伝統工芸品であったが、裕仁親王は会う人々へ折に付け文庫形唐草文のボンボニエールを贈ったという。

その後、半年に渡り欧州各国を歴訪した裕仁親王は、西欧諸国王室との交流を深めただけでなく、戦争の悲惨さも深く心に刻まれた。また西欧のリベラルな考え方や振る舞いもしっかりと身に付け、意義深い長い旅を終え、9月3日に帰国した。

帰国後の9月15日帰国祝賀の饗宴が開催され、鳩に地球儀形のボンボニエール[図c]が下賜された。平和の象徴である鳩3羽が地球を支えるモチーフは第一次世界大戦後の世界平和への願いが込められている。

翌大正11年には答礼として英国皇太子エドワードが来日した。エドワードは現在の英国女王エリザベス2世の伯父にあたる。来日途上の船内で「日本語のお稽古に熱心」であったことなどが新聞報道され、日本国内で大変な人気となったエドワード皇太子をもてなす宮中晩餐会では、印籠形のボンボニエール[図d]が配られた。表面には桐文が彫られ、緒締には珊瑚玉、赤銅の桜花形の根付をつけた技巧の凝らされた品である。

この大正大礼の諸様式は昭和大礼にも引き継がれ、昭和大礼でも儀式で使用される器物を模ったボンボニエールが作られた[図⑦~⑨]。

そして、平成、令和の即位に際しても同様にボンボニエールが制作されているのである[図⑩~⑫]。



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

皇女たちの結婚の物語

明治天皇の子供たちのうち、成年に達した男子は皇太子(大正天皇)一人であったが、内親王のうち4人は健やかに成長され明治40年代から大正初年にかけて結婚し、それぞれの婚儀の際にはやはりボンボニエールが制作された。

明治41年に常宮昌子内親王が竹田宮恒久王と結婚した際のボンボニエールは柳筥形[図⑬]。柳筥とは、神への供え物を納める際等に使用されるもので、白木の柳を細い三角形に割り並べ、糸で綴じた蓋付きの精巧な容器である。正倉院宝物にも十数点が残し、現在でも伊勢神宮では真珠などの神宝を収納する箱として使われている。それをボンボニエールでは、純銀の板と銀糸で再現し、さらに蓋表に菊の御紋を配し、赤色の絹の組紐が付けられた。この銀糸の繊細さは筆舌に尽くしがたい。

明治42年、周宮房子内親王と北白川宮成久王との結婚に際しては、文庫形ボンボニエール[図⑭]が制作された。文庫とは手紙や日記などを納める箱のことである。いずれも伝統的な「箱」を模したものであった。



⑬



⑭



b



d



c

a.扇形桐紋(ガーター勲章奉呈式後晩餐)大正元年 b.楕円煙草入形ガーター勲章紋章(アーサー王子饗応晩餐会)大正7年 c.鳩に地球儀形(東宮(昭和天皇)帰朝祝賀晩餐会)大正10年 d.印籠形(英国エドワード皇太子歓迎晩餐会)大正11年【abは個人蔵、ほかは当館蔵】